kurashi@mainichi.co.jp

さあ これから だ

鎌田 實

―32―

福島の子ども 支えたい

昨年の暮れ、歌手の加藤登紀子さんから連絡があった。年末恒例の「ほろ酔いコンサート」に来てくれないか。舞台に上がってお登紀さんとトークをしてくれないか――という依頼だった。それだけではない。「できたら詩を書いてほしい」と言われたのだ。

「ホウレンソウの悲しみ」という詩を書いた。

放射能に汚れたホウレンソウの悲しみがわかるか
安心して食べてもらいたいと思ったのに　人々の心を不安にした
ホウレンソウ草は悲しいだろうな

お登紀さんは泣きながら読んだそうだ。

コンサート当日、ぼくは会場の大阪芸術劇場に行った。開演2時間前だった。ぼくは、お登紀さんのギターで詩を朗読するのかな、と心の準備はしていた。ところが、行ってみると、ぼくの詩に続ける形で、お登紀さんが曲をつけていた。ぼくが詩を朗読し、それにお登紀さんの歌がコラボする――というスタイルの作品になっていた。

反応がすごかった。2000名のお客さんが気に入ってくれたのだ。コンサートの打ち上げで、お登紀さんに声をかけた。

「福島の子どもを助けたい。お金が欲しい。CDを作ろう！ボランティアしてください」

熱く熱く夢を語った。昔はこうやって、女の人を口説いたものだなァ……と、しみじみと思い出しながら。

「いいわよ」

返事は簡単だった。

大津波の後、何度も何度も雪が降った。放射能を含んだ雪が、畑や森や川や海や町を汚した。2011年3月、忘れられない雪になった。

15歳の女の子が、ぼくに聞いてきた。「私、大人になって、結婚して、赤ちゃんを産めますか？」

子どもたちを助けてあげたい――。心の中で誓った。2011年、忘れられない重い約束になった。約束を守りたいと思い続けてきた。その夢が、一歩実現に向かったと思った。

どんなアルバムにするか。福島の詩人の詩を使いたい。旧知の和合亮一さんに電話した。「CDの収益は全て福島の子どものために使う」と伝えたら「協力したい」と返事を頂いた。

ぼくらが選んだのは「貝殻のうた」という詩だ。

命よ　この星よりも　重たい命
命のはかなさを知って　泣いているあなた
私も　共に泣きましょう　共に
あなた　あなた　大切なあなた

これ以上はない、溢れるほどの優しい言葉たちが和合さんのツイッターで流れたのは、2011年4月25日のことだった。翌26日の未明まで、詩は次々に発表されていった。そう、偶然だ。それは25年前、チェルノブイリ原発が爆発したのと同じ日だった。

あのすさまじい光景のなかで、みんなが生きる力を失っている時、「あなた　あなた　大切なあなた」と呼びかける和合さんの温かな言葉に、たくさんの人が救われた。

その言葉たちをツイッターで見ていたのが、作曲家の伊藤康英さん。とっさに、曲を作ろうと思ったそうだ。

ちょっと疲れた人たちの心がふわっと温かくなるような歌い方で、お登紀さんがささやくように歌ってくれた。

素敵な曲になった。

もう一人ご登場いただいたのが、若松丈太郎さん。福島県南相馬市に住んでいる77歳の詩人だ。若松さんの「神隠しされた町」は、福島第1原発事故の17年前に作られたものとは、とても思えない。

「4万5千人の人びとが　たった2時間の間に消えた」という衝撃的な書き出し。双葉町、大熊町、小高町、浪江町、広野町……。原発から30キロ圏内のいろいろな町の名前が語られ、「そして私の住む原町」と続く。

原発事故の後、ぼくは許可を得て原発から20キロ圏内に入った。街には人っ子一人いない。「神隠し」が本当に起きたのだ。若松さんの詩はさらに続く。

神隠しの街はこの地上に　もっともっとふえていくだろう
私たちの神隠しは　今日すでにはじまっている

詩人の想像力は「想定外」をきちんと想定していた。

曲をつけるにはむずかしい詩に、お登紀さんは素敵なメロディーを乗せてくれた。たくさんの方に「神隠しされた街」を聴いてほしいと思っている。

「語り」と「歌」の両方を中心に据えた、素敵なCDができたと思う。たくさんの人に応援してほしい。

日本のリーダーたちは今、必死になって何事もなかったかのような「偽装」に努めている。だが、今まで通りでいいはずはない。日本の新しい生き方が問われている。

◇

福島の子どもを助けるために作った新しいCD「ふくしま・うた語り」（1500円）＝写真。ぜひぜひ応援して下さい！お問い合わせはJCF（電話0263・46・4218。ホームページhttp://jcf.ne.jp/）

（医師・作家、題字も）

＝次回は30日掲載

お登紀さんとともに、レコーディングスタジオで。当時はまだ、車イスでした

女の気持ち

2012.6.16

奇跡と一緒に

母は99歳で足を骨折し、手術を受けて退院したのもつかの間、東日本大震災と福島第1原発事故で被災し、私たちと一緒に弟のいる静岡県藤枝市へ一時避難した。

文句一つ言わなかった母も、10日後に故郷のいわきに戻った途端、大声で泣いた。

それから度重なる余震の中で歩く練習をして、少し歩けるようになったが、秋にひどい帯状疱疹にかかり、痛みの中で昨年11月、100歳を迎えた。

3カ月間の痛みに耐えたが、1月末に体調を崩し、そのまま寝たきりになってしまった。おとなしい母だったが、死への恐怖から今まで聞いたこともない言葉を吐き、夜は大声で体の不調を訴えた。

私は寝不足となり、「いくら親でも」と葛藤の日々を過ごした。これも看護する者の通る道かもしれないと、気を取り直したり、在宅介護の厳しさを感じた。

母は今では「死に神が昼寝しているから」「近々旅に出るよ」と子どもたちにユーモラスに電話したり、「ありがとう」と口にするようになった。

100歳まで大きな病気、事故にも遭わず、大震災をくぐり抜けたのは奇跡だと思う。

私は4きょうだいの3番目の長女として生まれた。両親は親孝行をするようにと「孝子」と命名したそうである。

身勝手につけられた名であるが、名前の通り、母の残り少ない日々を見守っていくつもりである。この奇跡と一緒にいられることを幸せに思っている。

福島県いわき市　根本　孝子　主婦・68歳

食卓の一品

ジャガイモの千切り炒め

1人前204キロカロリー、塩分1.1グラム

母直伝の炒め物。ジャガイモのシャキシャキ感が楽しい。

≪主な材料≫（2人分）
ジャガイモ大1個▽ピーマン1個▽オリーブオイル大さじ2▽ガーリックパウダー少々▽A（塩小さじ1/3、コショウ少々）

≪作り方≫
❶ジャガイモは皮をむいて千切りにし、水にさらしてでんぷんをよく抜く。ピーマンは種とわたを除き、縦に千切りにする。
❷フライパンにオリーブオイルを中火で熱し、水気を切ったジャガイモを加え透き通るまで炒める。ガーリックパウダー、Aで味を調え、ピーマンを加え火を切り、さっと合わせる。

料理研究家　松田美智子